

ABIC 国際社会貢献センター

Information Letter

No.17 2006年11月

海外での活動

ODA 関連	Rafaelaに乾杯!!	2
	泰日工業大学の開学—ABICとの関連について	3

国内での活動

外国企業支援	マレーシア家具促進機構の九州家具市場視察に同行	5
	Bilingual Business Adviser	6
自治体・中小企業支援	地方自治体／中小企業への国際化支援	6
教育	世界の諸情勢と日本の食への影響についての講演 —日本給食品連合会（日給連）夏季研修会—	7
	ABIC・関西学院大学共同プロジェクト 高大連携パイロット授業を実施	8
	中国人姉弟への日本語指導	9
	横浜商業高校4年目の授業	9
	大学対抗英語ディベート大会予選会でのボランティア活動	10
留学生支援	東京国際交流館の夏祭りを支援	10
	「日本語広場」特別研修会を開催	10
書評	『現代の総合商社 発展と機能』	4

事務局だより	日本語教師養成講座を開設	11
	ABIC懇親会を開催	11
	「高齢者雇用フェスタ2006」にブース出展	11

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター(ABIC) <http://www.abic.or.jp>
Action for a Better International Community

〒105-6106 東京都港区浜松町2-4-1
世界貿易センタービル6階 (社)日本貿易会内
Tel : 03-3435-5973 Fax : 03-3435-5979
e-mail : mail@abic.or.jp

【関西デスク】
〒552-0021 大阪市港区築港2-8-24 pia NPO 4階 413号室
Tel & Fax : 06-4395-1188
e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

Rafaelaに乾杯!!

JICAシニアボランティア
アルゼンチン貿易指導

かねこまさと
金子正登(元日製産業
〔現 日立ハイテクノロジーズ〕)

ブエノスアイレスの北538km、パンパのど真中に、牧畜と大規模農業の中心地であるラファエラ(Rafaela)市がある。人口9万の典型的な地方小都市で、2006年10月には市制125周年を迎えた。

G. Lehmann(※)により開拓が進められた街に、イタリア北部から移住した12家族により1881年に市制が発足し、その後、ドイツ系スイス人、フランス系、スペイン系が加わり、主として牧畜と農業を主体に発展を続け、今日に至っている。

※ Guillermo Lehmann

ラファエラ市の創始者。ドイツ人の移住者で、輸入ワイン代理店、販売業に従事、1864年にエスペランサ市(ラファエラ市の東約60キロ、人口5万、ドイツ移住地、市制150年)で、醸造所を経営する傍ら、殖民会社を興す。移住地として開拓した土地をイタリア、スイス、ドイツ本国で販売。ラファエラ市もその一つで、現在では、この地域最大の都市となった。

伝統産業以外にも、それに関連した国内有数の乳製品、肉加工等食品産業や自動車部品産業が、その存在感を示している。これら産業の輸出は、この数年、著しい伸長を示し、2005年の輸出実績は約224百万ドル、食品関連が全体の64%、自動車部品が32%を占める。仕向地としては、アフリカ向けが全体の33%、米国向け15%、ブラジル向け8%、残りはEUと中南米諸国向けである。

日本向けには、小規模だが乳製品の輸出実績がある。

日本向け輸出に長年取り組んできたこれら乳製品メーカーは、日本人が如何にアルゼンチンのことを知らないか、過去の度重なる経済危機、特に2002年の累積債務問題により、如何に信用失墜に至ったか、日本がEU製品で固定化され、市場参入が如何に困難で



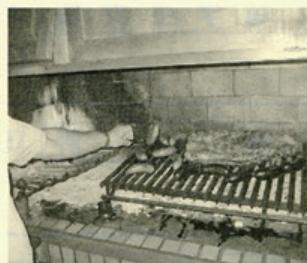
市役所前にて

あるかを認識している。

同市の標榜するRafaelino(ラファエラ市民)の特質は、“Simple & Friendly”。確かに、飾らず素朴で即友達になれるRafaelinoである。Rafaelaでの生活を始めて以来一年余になるが、街を歩くと、100mに1人は知った顔に出会い、挨拶を交わすことになる。日系家族も、現在、1家族が“眞面目な働き者”として存在感を示し、我々にとり生活し易い環境の基盤を作ってくれている。市の記録によると、1928年には8人の日本人が居住していたらしい。2軒のカフェ、1軒の洗濯業、小規模ではあるが野菜農園、養鶏場もあったようだ。

昨年6月に、当地の高校生約60人を対象に、90分の特別講義を担当したことがある。学校側からのテーマは“日本の企业文化”で、日本とアルゼンチンの文化比較、以前、ブエノスアイレスに駐在した1968~76年と現在のアルゼンチンの状況変化から話を進めていくと、Rafaelaの習慣、生活パターンと余りに差異があることから質問攻めにあい、90分が120分に延びたことを思い出す。

2005年4月に着任後しばらくして、市内有志の定例集会である火曜会に参加するようになった。元々は、少年サッカーチームの父兄たちの親睦を目的とする飲み会で、9年前に発足し今日に至っている。當時参加するメンバーは十数人で、アルゼンチンを代表する食肉メーカーのオーナー、農場経営者、弁護士、建築士、サラリーマンなど多士済々の集まりである。炊事当番が料理を準備するが、男料理の代表格であるアーサード等の肉料理が主要メニューとなる。



アーサード(焼肉)

小生もいつまでもただ食べるだけの人でいる訳にはいかず、典型的な日本の家庭料理の定番ということで、カレーライスと和風タレの串焼きを振る舞ったことがある。串焼きは好評で、噂を耳にした別の集まりでも提供し喜ばれた。

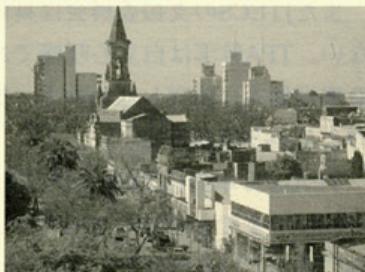
また、毎週木曜午後には、メンバーになっているカントリークラブで和気藹々のゴルフコンペが開催される。企業経営者、農場経営者、医者、自営業者等約30人が常連メンバーで、コンペ後には、メンバーの自宅、別荘での会食が開催され、小生にとっては業務上の貴重な情報源の一つになっている。このような集まりに

女性が参加したり、顔を見せる事ではなく、完全にマッチョの世界を楽しんでいると言える。

地価が安いこともあるが、広大な敷地内にプールを配した家も多い。自宅の他に、郊外に別荘を持つ家族も増えており、いずれも1ヘクタール以上の広大な敷地内にアサードの設備とプールを擁している。娯楽の少ないRafaelinoにとって、週日と週末の生活パターンを変え、気分転換することは重要なことのようだ。

過去に、ブエノスアイレスを皮切りに、中南米、アジア、米国、欧州の大都会に居住し、それなりに生活をエンジョイしたつもりでいたが、常に職場の関係、日本人社会、自宅付近での限定された社会での生活だった。日本人が少ないという理由もあるが、小生にとって、Rafaelaは、本当の意味で現地の生活にとけ込ませてくれた初めての土地と言える。コミュニケーションに不自由しないという利点もあるが、異邦人を“Simple & Friendly”に受け入れる土壤、心意気を擁するRafaelinoのお陰と感謝している。

我が愛するRafaelaに乾杯!!



市内に5階建て以上の建物は15棟のみ

技術研修に多大の貢献をしてきた。それに並行してアジア学生文化協会が留学生の勉学に側面協力をしていた。両組織の理事長であった穂積五一氏は、時代の変化を察知し、先取りする形で留学生、研修生の多かったタイ国に斬新な理念の下に人材育成の機関の設立を計画した。

1973年、バンコックに泰日経済技術振興協会（TPA）が設立され、同時に日本側に国庫補助や民間資金を受けるための窓口であり、TPAのカウンターパートとしての社団法人日・タイ経済協力協会（JTECS）が設立された。TPAは、日本から金は出さず、日本人や日本企業のためのものではなく、全てタイ側の自主性を尊重し、運営も全てタイ人によって行うものとした。日本への留学生、研修生であったものが中心となり、熱意ある運営は大いなる成功を見た。80年代半ばまでほぼ100%であった日本の補助金事業は現在総事業費8.6億円のうち10%以下となり、ほとんどがタイ側の独自の事業となっている。技術・経営、日本語・タイ語の研修コースはそれぞれ年間1,000コースを数えるに至っている。

2003年、TPAは設立後30年経過し、念願であった技術系大学設立の構想を実行に移すことを決定した。目下開学に向けての準備が着々と進んでいる。

エンジニア教育を目指す

大学建設の土地は既に保有し、長年にわたり蓄えた資金で建物も建設中である。開学の理念は昨今のタイ産業界全体の抱える問題点、即ち優秀な技術人材の不足を解消するためのエンジニア教育の充実である。

設置する学部は、①工学部、②情報学部、③経営管理学部であり、2007年の初年度は3学部あわせて520名の学生を受け入れる。高度の理論追求でなく、产学協同で学際面に重点をおき、日本語教育にも力を入れるという。現在、タイ国では日本の自動車産業の集積が進んでおり、工学部では自動車関連工学に重点をおいたカリキュラムを作成している。

このようにして開学する泰日工業大学（TNI）では過去の経緯より、主として日本からの技術移転を念頭に計画を進めている。2005年、2006年の2回にわたり幹部が来日し、各関係先を訪問の上、種々協力を依頼した。2005年にはTPA会長以下5名が、2006年には設立委員会委員長がABIC（NPO法人国際社会貢献センター）及びJTBF（ABICに事務所を置く日タイビジネスフォーラム）に来訪、ノウハウ提供等の協力要請があ

泰日工業大学の開学 —ABICとの関連について

前ABICメコンデスク担当コーディネーター
(日タイ・ビジネスフォーラム副会長)

吉川 和夫

2007年6月、タイ国に泰日工業大学（Thai-Nichi Institute of Technology）が開学する。名前が示す通り日本との関係が深い。設立の目的及び背景より判断し、真に意義ある大学と受け止め、日本側は官民あげて支援のムードが高まっている。ABICとて例外でなく、今後の進展如何では関係が深まるだろう。背景をまず説明したい。

設立の背景・経緯

財團法人海外技術者研修協会（AOTS）は1959年に設立されて以来、海外より多くの研修生を受け入れ、



った。

TPAのカウンターパートであるJTECSは内部にTNI支援委員会を設けた。委員には東大、京大、東工大など16の大学より主として工学部系の教授、トヨタ、ホンダ等の民間企業9名、メディア2名、政府機関9名で、民間団体は日本経団連とABIC/JTBFである。ABIC/JTBFからは私、吉川が選任された。

評価されたABIC/JTBFの活動

民間団体から何故ABIC/JTBFが選ばれたかにつき、若干述べたい。

(財)海外技術者研修協会(AOTS)は毎年海外より研修生を日本により研修の機会を与えていた。最近は技術以外にも中小企業経営者を招聘し、マーケティングや市場論のセミナーを開催している。タイ国やベトナム関係のマーケティング論セミナーを6回にわたりABICのメコンデスクが一括受託し、それぞれ7、8名の講師

を派遣、また、他のセミナーでも部分的に数回数名の講師を派遣した実績が評価を受けることになり、ひいては兄弟関係のJTECSにも認識されたためである。

AOTSのセミナーにはABIC活動会員の諸氏に絶大なご協力をいただいたこと、またABIC会員では貢献のない分野にはJTBF会員(総勢60名だが各業種を網羅し、全員がその道のエキスパートである)の協力を得て努力したことが背景にある。

まだJTECSの支援委員会は具体的な活動を開始していない。TPA幹部は自立心旺盛であり、自分たちで出来る事は他人に依存しないゆえ、依頼があるのは少し先のことかと思われる。

TPAは日本のODA資金供与先としてスタートしたが、いつまでもODAに依存せず、自立して望ましい方向に進んでいる組織として各方面の注目を浴びている。今後とも要請があった場合、各位のご協力をお願い致したい。

書評

『現代の総合商社 発展と機能』

土井教之・伊藤正一・増田政靖 編 晃洋書房発行 定価2,700円(税別)

関西学院大学経済学部では企業活動の実際を学生に知ってもらうために、早くから「経済学トピックス」という特別な講座を設けて来たが、2002年からは日本貿易会及び国際社会貢献センターと連携して、複数の総合商社OBあるいは現役社員が自分の最も経験深い現場の様子を直接学生に語りかける特殊講義を毎年開催している。本書はこの講義を進めていく過程の中で、2005~06年度の担当講師たちが、総合商社の発展・機能そして今後の課題と方向などについての議論をテキストとしてとりまとめたものである。

大学生を対象としているため、表現を出来るだけ平易にし、商社の全体像を把握しやすいように心がける一方、各執筆者はその道のエキスパートとして、それぞれのテーマについて、自己責任の範囲内ではあるが自由闊達な議論を展開しており、結果として多様な視点、多様な表現が混在し、ユニークな面白い読み物となっている。

内容としては講座を主管された土井教授の商社についての産業組織論的考察に続き、戦後から現在に至る商社経営の変化、代表的な商品としての衣・食・エネルギー産業への関わり、金融・リテール分野・ビジネスモデル企画・知的財産などに関連する商社機能、最新の情報通信技術や電子商取引への取り組み、そして日中経済関係の泰斗である伊藤教授による日本商社の中国への進出状況解説などいずれも最近の話題が網羅されている。また商社の人事や組織の問題、今後の総合商社の進むべき方向など従来の類書にないテーマの取り上げも注目したい。読書の季節に向けて一読をお勧めしたい好著である。



(ABIC理事長 三幣 利夫)

マレーシア家具促進機構の九州家具市場視察に同行

かねたか まさあき
金高 正明（元伊藤忠商事）

ABICコーディネーターの大道豊彦氏からの紹介により、マレーシア家具促進機構（MFPC：Malaysian Furniture Promotion Council）の九州家具市場調査およびマレーシア家具販売促進の官民一体の代表団の九州訪問に通訳として8月1日より3日半同行した。以下は、素人通訳体験記である。

小職は伊藤忠在職中、エネルギー化学機械部門の担当でマレーシア、インドネシア、韓国、インド、台湾等に度々出張、サウジアラビア、アメリカに合計11年間駐在した。またアジアビジネスセンターの役員として出向中に、アジアと九州のIT産業の交流フォーラムを福岡にて主催し、マレーシアよりマハティール首相、その時閣僚であったアブドゥラ現首相、ラフィーダー通産相等を招聘、マハティール首相に基調講演をお願いした。九州支社在職中にはマレーシア、インドネシアより大川市（日本一の家具製造業者の集合地帯）の家具製造会社にKnock-down家具の開発輸入に従事した。この度の通訳の仕事は大役とは思ったが、上記の経験もあり、また国際貢献の一助になるならと思い、引き受けた。

MFPCは、マレーシア政府の外郭団体でかつて日本への輸出シェアはトップであったが、現在は価格面で中国、インドネシア、ベトナムに後れをとり、その地位は7位まで後退している。このため対日輸出を強化すべく、九州地区の有力家具卸、小売、製造業者の視察ツアーを実施した（全日程8月1日～8月5日）。



家具製造工場を見学した一行（右端筆者）
写真提供 ©ルームファニシング

8月1日の来福初日、福岡空港にて面会した一行は、マレーシア政府高官であるアブドゥラ団長の他、マレーシア家具協会のスタッフ、



ショールームにて（左から2人目筆者）
写真提供 ©ルームファニシング

家具製造業者や資材メーカーなど様々なジャンルの団員、そして日本側の案内役の東洋ファニチャーコンサルティング阿部野社長ほか総勢25名であった。それに対し通訳は小職一人のみで、このことは当日まで全く知らず、大変ショックであった。

福岡空港より貸切バスにて門司の巨大ショールームとテント倉庫の家具卸業者を回ったのを皮切りに大川市、佐賀市、福岡市とタイトな日程にて工場見学、店舗訪問、商談会をこなし、夜は九州家具協会長や訪問先の役員を招待しディナーパーティー、懇談会と続く炎天下の3日半の通訳業務に、体力、気力がもつのか心配した。しかしながら、団員の方々の商売熱心、真面目な対応に心動かされ、商社マンとして悪戦苦闘していた現役時代を想い起こしつつ、また日頃のゴルフの鍛錬もあってか無事乗り切った。

3日半の短い付き合いであったが、最後の総括会議では通訳というよりは視察の総括や商談のコンサルタント的な役目も任され、大変楽しく有意義な日々であった。

余談であるが、団長と東洋ファニチャーコンサルティングの社長はゴルフがシングルの腕前で、ゴルフ談議に花が咲いた。団長より『おみやげに中古のアイアンセットを3セット、自分用にミズノのドライバーを1本購入したい』との依頼を受け、私の懇意にしている市内のゴルフショップに同行、破格の値段で購入できること、またTOTOの最新の便座も欲しいというので地元のDiscount Shopを紹介、ねばりにねばり予算内で購入できた。大変満足されたせいか最後の晩、MFPC役員全員参加のDinnerの接待を受け、マレーシア茶のお土産まで頂き再会を約束させられた。

炎天下の上、慣れない素人通訳で、専門外の商談、1対25の対面等で心身ともに疲れたが、ABICの一員として誇りをもって損得なしに従事できたのは、小職のつたない通訳にも文句を言わずフルサポートしてください

国内での活動

さった団員の皆様のお陰だと感謝している。

最後に、ABICの大通コーディネーターはじめスタッフの皆様からご支援を頂き重ねて感謝申し上げる。体力の続く限りABICの会員として少しでも国際貢献ができればと念じている。

Bilingual Business Adviser

外国企業支援担当コーディネーターとしての仕事は、発足当時のいきさつにも起因するのだが、日本の国際見本市に出展する外国企業への通訳者の紹介が主な柱となっている。

通訳者と聞けば、20~30歳代の女性をイメージする人が多いのだが、ABIC会員の通訳者は通常60歳以上の男性である。しかも恰幅^{かっぷく}が良すぎて嵩高い。しかし、クライアントの製品と業界について造詣が深いので(と言うより、そういう人を選んで紹介するので)、単に通訳だけではなく仕事のアドバイスもできるという利点がある。実は、これがABIC通訳者の最大のセールスポイントであり、低価格市場での競争相手である帰国子女などと差別化できる点もある。このため「単なるInterpreterではない」という意味で「Bilingual Business Adviser (BBA)」と呼んでいる。

しかし、見本市主催者や出展各社へのBBAの売り込みは簡単ではない。典型的な例だが、某大手見本市主催会社からは次の理由で断られている。(1) 水準レベル以下の通訳者の混入を防止する品質管理制度がABICにはない。(2) クライアントが通訳者に会った直後に、語学力、性格、ルックス等を理由に受け入れを拒否して別の通訳者との取り替えを要求することがあるが、それへの即応能力がABICにはない。

だが、このことをもって当該企業が「出入りの通訳派遣会社と癒着している」と勘ぐるのは筋違いである。(1)については、ABICとしては「通訳可」と申告した



会員の中から紹介するのだが、「通訳可」が自己申告である以上、実力にバラツキがあるのは避けられない。長らく使用しないでいるとレベルが低下するという問題もある。だからと言って、共通試験を頻繁に行うというのも非現実的である。(2)については、募集は原則としてEメールで行うのだが、適任者が特定できるときや急ぐときは電話することもある。ただ、電話しても留守の場合が予想外に多い。奥さんが在宅でも安心はできない。「国際社会貢献センターです」と名乗ったら、「間に合っています」ガチャンとやられたこともあるぐらいだ。

それはともかくとして、この10月4日~6日に東京ビッグサイトで開催されたCMPジャパン主催の「食品開発展」では12名ものABIC会員がBBAを務めた。昨年の「健康博」に4名が参加した際、「歴史的快挙だ」と喜んで、野津前事務局長と一緒に各ブースを回ったのが、今となっては滑稽だったことになる。

最近、BBAを務めた人の中には、特定のクライアントから毎回、指名されるため指名料(?)を取るようになった人や在日エイジェントの声がかかる人も出てきている。Business Adviserとしての価値が認められた結果である。今後この傾向がいっそう強まり、ABICブランドとしての「Bilingual Business Adviser」が国内外で定着することを願っている。

(外国企業支援担当コーディネーター おおみち とよひこ 大道 豊彦)

地方自治体／中小企業への 国際化支援

地方自治体および中小企業への協力は、会員各位の知識・経験・人脈を最大限に活用する活動としてABIC設立(2000年)以来、昨2005年度までの活動人数は、

延べ約320名に達しています(ABIC全体では約2,200名)。構造改革の流れを反映して、実務経験の豊富な企業OBの活用を望む自治体からの依頼、あるいは相互の情報交換でABICの活動を知った遠隔地の自治体からの問い合わせが増えてきています。

国際化支援の業務内容は、翻訳／海外同行(通訳／折衝等)／海外での販路拡大／輸入販売／海外事情講演講師等の支援、また国内関連では製品の販路拡大支

援／セミナー・研修講師等、多岐にわたっておりますが、地元企業をより積極的に支援するため、ABICとの間で包括的支援に関する業務委託契約の締結を希望する自治体も増えています。これまで首都圏の1県のみでしたが、本年から2つの県が加わりました。遠隔地の県なので、経費および運用面で難しい点もありますが、工夫をこらしつつ活動の場を広げるよう努めています。

今後とも会員各位のご協力をお願いする上で、下記の点につきご理解をお願いいたします。

- 国内外での販路開拓支援は、現役時代に手掛けたことのないような特殊かつ細かな末端商品も多いのですが、産業／商品グループ、得意分野／地域などから少しでも関連のありそうな会員を検索し、募集メールを回付しています。特殊で高度な商品知識を必要としない限り、販路開拓活動は地道な努力とやる気が決め手です。営業活動が得意で、足で稼ぐ努力をしてこられた皆さまのご応募をお待ちしております。
- ABICの活動はいうまでもなく何らかの形で社会貢献に寄与することが大前提となっています。特に自治体への協力は、官に代わって少ない予算で民が行う、即ち小さな政府の実現／構造改革推進の一端を担うとの意識で活動しています。単なる再就職斡旋業務ではありませんのでご承知願います。
- JICA／JETRO等、政府系の団体と同じように自治体の一部にもシニア人材を公募する場合があります。ABICはこれらの情報をお知らせし、希望する会員が

直接応募できるようご連絡しています。ABIC会員の活動の実態把握ならびに今後の参考のため、首尾よく採用になられた会員の方は、必ず事務局宛て連絡願います。

- 規定期間の経過後あるいは年度替わりに契約が更新され、引き続き業務を遂行されている会員の方は、事務局宛てその旨ご連絡をお願いいたします。
- 履歴書／職務経歴書は、通常E-mailに添付して提出しますので、あらかじめ作成の上パソコンにファイルしておかれようお奨めします。当方にお送りいたします際、内容のUp Dateと日付の更新をお願いします。また、これらの書類の書式は通常、形式自由ですが、独立行政法人、財團法人など政府系団体所定の書式を要求される場合は、当方より所定フォームをお送りします。
- 職務経歴書にも氏名の記載をお願いいたします。履歴書には当然、住所・氏名を記載しますが、まれに職務経歴書に氏名が記載されていない場合が見受けられます。履歴書と別個に作成した場合には、該当者不明となる可能性がありますのでご注意願います。

中小企業支援コーディネーターは、特定地域担当を含め、現在4名体制で担当しており、皆さまの活動の場をさらに広げるべく活動を続けています。引き続きよろしくご協力をお願いいたします。

なお、活動の概要は、皆さまのご寄稿をもとにこれまで通り、毎号のInformation Letter「自治体への協力」欄で紹介して参りますので、ご一読下さい。

(中小企業支援担当コーディネーター 高廣 次郎)

教育

世界の諸情勢と日本の食への影響についての講演 —日本給食連合会(日給連)夏季研修会—

7月13日から14日にかけて1泊2日で、日給連の夏季研修会が200名を超える出席者を迎えて、京王プラザホテルで行われた。田中耕太郎会長の開会挨拶の後、ABIC名鏡事務局長がパワーポイントを使いながら10分間、ABICの現状を説明した。その後、ABICの会員4名が各自のテーマで講演し、14日のパネルディスカッションでこの研修を締め括った。

日本給食連合会(日給連)は今年47周年を迎えた



連合会で、主として業務用食品の卸売業を行っている会員が、学校給食・産業給食・弁当や仕出し等の集団給食・外食関係ユーザーへの食材供給を業態として行

国内での活動

っている。70社の有力な会員企業と24社の特別会員（メーカー）で、非常に活発に運営されている。

昭和54年頃よりは会員向けにセミナー・シンポジウム・研修会が毎年企画され、多方面からの講師による講演が行われてきた。

今年のテーマは、高騰しなおかつ需給が世界的に逼迫する資源と、連合会が一番関心を持つ日本における食料・食材への影響を取り上げることとなり、ABICに対し講師の派遣の要請があった。

講演のテーマと講師は以下の通りである。

7月13日

- ①「鉱物資源の世界的需給動向と日本の食への影響について」 牧村惣臣氏（元三井物産）
- ②「世界の食糧事情と日本の食文化について」 近藤治夫氏（元丸紅）
- ③「BRICsから見た食糧問題について」 田内裕氏（元三井物産）

7月14日

- ④「躍進するニューフロンティア—ベトナム農業について」 一色修二氏（元日商岩井）

全講演のあと、丸紅経済研究所の柴田明夫所長が座長となって全講師とパネルディスカッションを行い、テーマ全体の総括が行われた。

2日間にわたって熱心に聴講されていた受講者からは、非常に広い視野から、また世界各地での経験に触れながら、現在の問題と将来の課題に触れる話が聞けたと好評であった。

前号のInformation Letter 16号でお伝えした「アミューズメントパークについて明星大学で講演」に続いて、非常に専門的な領域「資源と食糧」に、4名の講師を派遣して講演を行ったことは、改めてABIC会員の幅の広さを示すものと実感した次第である。今後とも引き続き企業や団体の幅広い講演会・研修会のニーズに応え講師を派遣していきたい。

（大学講座担当コーディネーター 谷川 達夫）

ABIC・関西学院大学 共同プロジェクト

高大連携パイロット授業を実施

関西学院大学とABICが共同し、本年8月8日、9日の2日間、高校教諭3名の参加を得て高大連携夏季研修をパイロット授業として関西学院大学で実施しました。高大連携は、大学の講座に近隣の高校生も受講できるというものが一般的ですが、本プロジェクトは大学生と高校生が主体性を持って研究に取り組むことを主眼とし、大学教授、高校教諭、ABIC会員がその研究をサポートする体制をとっており、他に例を見ない高大連携となっています。

プロジェクトに参加している宝塚西高校、啓明学院高等部、関西学院高等部から14名の生徒が参加、同大学から12名の学生が参加しました。

米国をテーマにしたABIC講師3名（敬称略 野村哲三：元三菱商事、中西康孝：元三菱商事、新谷大輔：三井物産）による基調講演に始まり、学生および生徒は4班に分かれ『映画でみるアメリカ高校生のライフ・スタイル』『社会・民族 日本がアメリカから学ぶこと』『NPOとソーシャル・アントレプレナー』『歌を通して見るアメリカ』の4つのテーマをそれぞれ選択し、大学生が指導役を務めて図書館やインターネットで資料を集め、研究発表会を行いました。

この発表会の模様は、ユニークな取り組みとして朝日新聞阪神版にカラー写真つきで報道されました。同大学では、今回のパイロット授業を踏まえ、来年度は内容をさらに充実させ対象高校も増やすなど、正規の授業として取り組む方向で検討されています。

（関学・ABIC共同プロジェクト・コーディネーター 宇佐見 和彦）



中国人姉弟への日本語指導

よしだ あきら
吉田 明（元三菱商事）

ABICからご案内があり、外国人小学生の日本語指導という私としては初めての経験をさせていただきました。

お預かりしたのは小5と小1の中国人姉弟で、アメリカで幼時を過ごしたあと昨年暮れ来日しました。母親の仕事の関係で転校することになり、私の授業は夏休みまでの半年で終わりましたが、この間に日本の学校生活にかなり馴染むことができたようです。

はじめのうちは学校へ行くのをいやがることがありました、まわりから聞こえてくる会話の理解度が上がるにつれて元気よく登校するようになりました。彼らがこのように日本の生活に順応できているのは、彼らの資質が優れている（姉の楠ちゃんはもちろん、写真に写っている小1の桐君もあっという間にひらがなや数字を覚えてしまうなど）ためなのですが、それに加えてまわりの先生やクラスメートが彼らを温かく迎え入れようとしているのを印象深く拝見しました。というのは私は娘の学校生活を通して日米の児童教育の違いを強く感じていたのですが、今回このような情況をみて日本の教育環境もかなり良くなっているように思ったのです。

私が小1の娘を連れてロサンゼルスに転勤した32年前は、現地小学校のアメリカ人先生が放課後に英語の個人指導をしてくれて、知らないうちに学校生活にとけこむことができ、そういうやり方に感動し、また感謝したのです。ところが帰国してからの英語の授業は、娘の一番得意とする時間と思ったのですが、実際はその逆で一番いやな時間だったのです。よく聞いてみると彼女の発音が先生や級友に拒絶されて、日本式の発音にしないといじめられたり仲間はずれにされたりするというのです。懸命にジャパニーズイングリッシュの発音を練習していました。

今回の日本語指導は、授業中のクラスから抜け出て個人レッスンをするというかたちで週2回各2時間の授業を行いました。半年という短い期間でしたが、読み書きはほぼできるようになりました。難しいのは会話で、とくに自分の口から日本語をしゃべることがなかなかできません。それでもあと半年も経てば様変わりとなり、転校する新しい学校には元気で通うことがで



きると思います。

ますます進む国際化の中で、不安をかかえてやってくる外国人児童をこういったかたちで受け入れ支援していることを知り、とても明るい気持ちになりました。

横浜商業高校4年目の授業

横浜商業高校に国際学科が創設された2003年に、同校での国際理解教育の一環として、ABICの会員による出張授業がスタートした。

今年で4年目を迎えた訳だが、その間、合計17名の会員が講師を務め、延べ36時間の授業を実施した。取り上げた国数は13ヶ国、テーマは20に及んでいる。

受講した横浜商業高校の生徒数は4年間で延べ160名を数えるが、その第一期生が1年生時に受講した授業からテーマを選び、2、3年生時に自主研究した内容を、2006年春の卒業を前に発表した。

ABIC関係者も発表会に招かれて見学したが、その発表内容は、「アイヌ民族の独自文化と彼らが受けてきた迫害」、「開発途上国の子供達」、「世界における地雷問題」、「韓国の日本に対するイメージ」といった難しい問題を取り上げたものであり、映像を駆使しながらも決められた時間内にぴったり纏め上げるという、ABIC関係者も大いに啓発されるもので、感心すると同時に、若い国際人が育っていく喜びを感じた。

「ホスピタリティのスコットランド」、「ファッショングのイタリア」、「石油の中東」、「貧困と人種問題のアフリカ」、「大国のお隣り中国」、「社会主義を捨てたロシア」、「プロムのアメリカ」、「先進国への仲間入りが近いブラジル」の8つが本年のテーマであった。

どのテーマを担当した講師も、かつて自分が勤務した土地には限りない愛着があって、ともすると、その

国内での活動

愛着が自慢話に発展して行きかねないのをじっと抑えつつ、それぞれの土地の特徴を客観的な評価の下に取り上げて紹介した。授業方法も、近頃の生徒の傾向に合わせて、カラープリントやパワーポイントを駆使し、民族衣装や民芸品を身に着けてみるといった工夫を凝らしていた。

感受性の最も強いティーンエイジャーに対して、外国に暮らした経験を公平に愛着を込めて紹介し、次代を背負う若者を意味のある国際理解に導いていくとともに、驚きと感動を与える結果となることがABIC講師の大きな喜びである。

(国際理解教育講師派遣グループ・コーディネーター
角井 信行)



大学対抗英語ディベート大会 予選会でのボランティア活動

今年も日本英語交流連盟からの要請で、2006年度大学対抗英語ディベート大会にChairpersonとしてのボランティア参加を会員に呼びかけたところ、5名の方が参加されました。10月8日、オリンピック記念青少年総合

センターにて終日、32大学からなる予選会の進行を下記会員の方々が担当され、その労に対し同連盟から高い評価を受けました。翌日は決勝リーグに勝ち残った8大学で争われ、ICUチームが優勝しました。

参加者（敬称略、氏名五十音順）

漆崎 隆司	元ニチメン
岡田 恵二郎	元ニチメン
須賀 直彦	元ニッセイ同和損害保険
長嶋 昭美	元住友商事
中村 嘉孝	元三井物産

東京国際交流館の夏祭りを 支援

7月29日夕刻より恒例の東京国際交流館の夏祭りが開催されました。同センターの中庭に立てられた櫓の周りを交流館居住の留学生と家族、地域の有志による盆踊りのサークルが、東京音頭、炭坑節などに合わせて踊りを楽しみました。

ABICからは参加学生用に浴衣を寄贈して盆踊りの雰囲気を楽しんでもらいました。



「日本語広場」特別研修会を 開催

毎年8月、「日本語広場」は夏期休暇ですが、資格試験を目指している留学生およびその家族の強い要請で特別研修会を8月21日から25日の5日間開催しました。参加者は延べ36名でした。

【留学生支援グループ】

事務局だより

日本語教師養成講座を開設

10月17日から日本語教師養成講座がスタートしました。(社)日本貿易会から会議室使用の便宜を計らっていただき、ABIC会員およびその家族を対象にした短期養成講座を開設、30名の参加者で3教室を編成、来春3月末までに100時間の研修を行います。

受講者の希望を入れて、毎週1回、火曜、金曜は10:00から、水曜は17:30からそれぞれ3時間の講義・実習を22回実施します。来春以降の第2期の開催は未定ですが、参加希望、問い合わせ等は担当までお知らせ下さい。(担当 山田 雅司)



ABIC懇親会を開催

9月22日18時～19時半、メルパルク東京にて会員懇親会を開催しました。ABIC正会員、役員、活動会員および日本貿易会関係者ら合計150余名の参加者を得て、大変盛会でした。



「高齢者雇用フェスタ2006」に ブース出展

10月4日、東京ドームシティ・プリズムホールにて「高齢者雇用フェスタ」が開催され、ABICは、「再チャレンジゾーン」に専用ブースを構えパネル展示するなど多くの来場者に活動をPRしました。今年で4回目になりますが、高齢者を活用するNPO組織の事例として出展の要請があり参加したものです。

同フェスタは、毎年10月「高年齢者雇用促進月間」に、高齢者雇用問題についての啓蒙活動の中核的行事として、独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構が厚生労働省等の後援を受け、(財)高年齢者雇用開発協会および(社)東京都高年齢者雇用開発協会と共に開催するものです。

今年のフェスタでは「団塊世代力が活きる社会をめざし」をテーマに、高年齢者雇用開発コンテストの表彰、「高年齢者雇用開発フォーラム」および「NHK土曜フォーラム公開シンポジウム」が実施されたほか、高年齢者の雇用就業等に係る各種「展示」、「セミナー」等が併せて実施されました。



新会員登録票・アンケートを未提出の方はご協力願います。

当センターホームページ「賛助会員・活動会員入会案内」(<http://www.abic.or.jp/register/index.html>)の申し込み書にご記入のうえ事務局宛てお送りいただきますようお願い申し上げます。

お問い合わせ先：Tel. 03-3435-5973

Fax. 03-3435-5979

e-mail mail@abic.or.jp

扇、道家

会員入会のお願い

国際社会貢献センターの活動にご賛同頂き、会員として資金的援助をしていただける個人の方や企業、団体のご入会をお願い申し上げます。

種類	内容	年会費
正会員	センターの活動を推進する個人、法人及び団体。 (理事会の承認を得て入会)	法人及び団体 一口 50,000円
		個人 一口 10,000円
賛助会員	センターの趣旨に賛同し、会費を納める個人、法人及び団体。	法人及び団体 一口 10,000円
		個人 一口 5,000円
活動会員	センターに登録し、センターの事業に参加しようとする個人。	不要 一 一

正会員

団体・法人(16社)					(社名五十音順)	
〈10口〉	(社) 日本貿易会 豊田通商(株)	伊藤忠商事(株) 丸紅(株)	住友商事(株) 三井物産(株)	双日(株) 三菱商事(株)		
〈4口〉	(株)日立ハイテクノロジーズ					
〈2口〉	稻畑産業(株)	長瀬産業(株)	阪和興業(株)			
〈1口〉	協同木材貿易(株)	興和(株)	JFE商事ホールディングス(株)	蝶理(株)		
個人(4名)					(敬称略・氏名五十音順)	
池上久雄 小島順彦 寺島実郎 宮原賢次 吉田靖男						

賛助会員

法人(2社)					(社名五十音順)	
(有)イーコマース研究所					キーリサーチネット(株)	
個人(308名)					(敬称略・氏名五十音順)	
〈1口〉	伊東孝之 松本時男	上野日出雄 安田勤	小室洋三 山本啓二	坪井雅敏 山本博勝		

活動会員 1,589名

(2006年10月31日現在)

e-mailアドレス・住所等の変更届けはお忘れなく！

**e-mailアドレス・住所などの変更がありましたらご連絡ください。
転居先不明で返送される例が増えています。**

e-mail : mail@abic.or.jp FAX. 03-3435-5979